

がて交流を始める。
「ダウンの中の羽根って、どこから出てくるの?」。ま
すみか着ている薄汚れたダウ
ンジャケットの肩に載った羽
根を見た平田がかつて妻とか
わした会話を思い出すシーン
だ。生地が破れているわけ
もなく、縫い目が粗いことも
ないのに、ときどき浮いて出
ている白い羽根。平田とます
みは、誰の気にも留められず、

心と脳——認知科学入門

知識の断片再統合の手助けに

今世紀に入りようやく人間の
心が科学の対象として受け
入れられてきた。人間の心を
対象とした総合的な科学を認
知科学と言つ。心についての
伝統的な学問である心理学に
は、多様な学説があつても統
一的な説明原理がなかった。
新興の学問である認知科学は
「情報」という概念で人間の
心に関する膨大な知識をまと
めることを志している。筆者
は認知科学の黎明期である1
970年代からこの学問に関
わり、育ててきた。本書は著
者による認知科学全般のはじ
めての一般向け解説書であ
る。

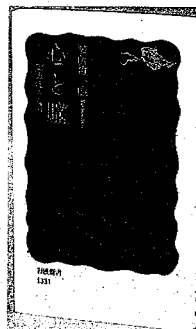
捨てず、手を差し伸べる。そ
の思いを受け入れ、勇気を奮
い生きようと決意するます
み。ほんのわずかに明るい光が
垣間見えたとき、もはや自ら
の生すら諦めている平田のた
めにますみが選んだ行動は哀
切に満ちた結末を導くこと
になる……。

「葉桜の季節に君を想つと
いうこと」「密室殺人ゲーム」
シリーズなどで、本格ミステ
リ

はいないだろうと覚悟してい
たが、着地点はやはりハッピ
ーではなかった。
解き明かしてはいけない真
実。ささやかな絆で結ばれた
ふたりがそれぞれに向けた思
いは償いのためか、救済のた
めか。誰が救われ、誰が心の
安寧を得たのか。問いが次々
浮かぶ。だが、その一方で現
実ってこんなものだと愕然と
させられていることも確かだ

い切れない揺らぎが静かな余
韻を残す。謎を解き、真相を
暴くミステリーとは明らかに
異なる。人の心がいかに深い
階層を持っているかを突きつ
けられる優しく残酷な物語
だ。
(文芸春秋、1575円)

安西 祐一郎著



【評】梶 よう子 (作家)

ばらにしないところにある。
認知科学や基礎心理学の入門
書では、記述の都合からどう
しても人間を下位機能に分解
せざるを得ない。典型的には、
感覚・知覚からはじまり、学
習、記憶、発達、情動、思考、社
会のような順番で、すなわち
各論で解説が進む。本書では
3章の一部を除いてこのよう
な形式はとらない。第1章に
おいて、「コミュニケーションす
る人間」、「感動する人間」、
「思考する人間」、「熟達す
る人間」、「創造する人間」の五
つの人間像が紹介される。続
く章ではこれらの人間像を常
に意識しながら人間の多面性
を解説し、これらが本質的に

絡み合った存在として人間を
理解しようとする。人間を総
体のまま理解しようという著
者の意気込みが、このような
形式を選ばせたのであろう。
第5章から8章までは「誕
生」「形成」「発展」「進化」と銘
打って認知科学の史的形過
程が語られる。私はこの部分
をもっとも楽しく読んだ。さ
まざまな分野の研究が鳥瞰
され認知科学というひとつの
流れを作つてゆく語り口の見
事さを味わうことができた。
私が思わずにやりとしてし
まった記述がある。「心の研
究を重視する人たちは、脳の
研究をしたところで心はわか
らないと考えていることが多
く、脳の研究を重視する人々
は、脳がわかれば心がわかる
と思つていことが多い」(74
ページ)。そのとおり。人間
の心と脳に関する情報は世界
にあふれている。本を読めば
読むほど、心と脳は茫漠の彼
方にかすむ。本書はしかし、
さまざまな類書を読んで断片
化された知識を再統合する手
助けとなるはずだ。
(岩波新書、903円)

【評】岡ノ谷 一夫 (東大大学院教授)

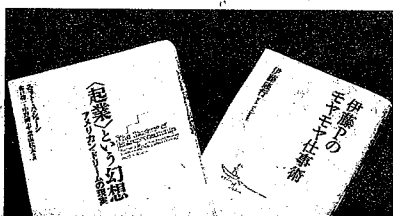
BOOKS

3. 「波」(筑土秀玄)
「戦前の教科書に載る『津
波』」(松浦きぬ子)
「東京都千代田区神田佐久間町2
-7第6東ビル601 長野県人
会連合会」
■郷土誌「伊那路」
(第658号)
「春近郷・上殿嶋村内の『馬入
村』について」(池上正直)、「西
天竜水田地帯に見られる円筒分水
槽」(若林博)、「仮面土偶の系
譜」(土偶は何が為につくられ
たかの再検討」(田中清文)



人男性で、これまで
のと同じ業種で起業
貯金を中心。会社
時より収入は少なく
数年で撤退する割合
まり、彼らはどこに

経



天才的なアイデアを持ち、若
くして会社を設立。市場から多
額の資金を調達して、リスクを
ものともせず会社を成長させて
いく。
「起業家」にそういうイメー
ジを持っている人は多いだろ
う。具体的には、先頃亡くなつ
たアップル社創業者のステイ
ブ・ジョブズ、現在収監中の堀
江貴文ライブドア元社長の顔
が思い浮かぶ。
しかし、「〈起業〉という幻
想」(スコット・A・シェーン
著、谷口功一訳、白水社、2
520円)が描き出す米国の起
業家たちの実像は、およそ革命
児からは程遠い。
典型的な起業家は、40代の白
隣さん」の一人なの
著者は、統計を分
で起業の幻想を崩し
決して起業すること
していない。少数で
業によって大成功し